

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	俳句：文苑
Author(s)	千沔；紫川；千泣
Citation	龍南會雜誌， 6 8： 4 7 - 4 9
Issue date	1898-11-09
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5173">http://hdl.handle.net/2298/5173</a>
Right	

山對層樓翠色濃。一川迴去遠如縫。溫峯杳靄高千丈。夜々松間古寺鐘。

早曉

東峯漸白曉鴉鳴。殘月西枕滴露明。誰結池塘春草夢。征人萬里在邊城。

七夕有感

綠蔭松下遇佳辰。金酒銀杯待嘉賓。今夕行雲南北去。不知明日別離人。

軍中聽笛

霜寒高壘睡難成。幾處連營片月明。戎笛三更遠近動。聲々愁殺他鄉兵。

題宮城圖

九重城頭淡靄籠。風和鳥語入長空。池邊楊柳受朝日。常見千秋萬古同。

俳句

涼風吟

山陰に狭き青田の木曾路かな

雲の峰大はげ山の眞上なり

敷帳狭く宿のあるじと寝たりけり

南門に橘薫る旭かな

視て居ればまた子子の振り出す

癡寺井あり怪ありて九年没へざる

窓に入る青田七里にあまるべし  
五月雨の靴古くして水の入る  
晝顔や蚯蚓死したる野の小路  
蠅群れて干瓢いよゝ剥ぎ難き  
蜀の軍或夜越たり夏の川  
雨乞の聖を恨む國の人  
日南す鮮屋の店に蠅多き  
蚊の聲に若葉小暗き庭の隅  
一隅に茄子植ゑたる青田かな  
化鳥鳴くや鎖守の森の五月闇  
青嵐間道に起る閨の聲  
街道の太守の列や五月雨るゝ  
日は西に山道險し合歡の花  
明け方に雨ふりたえぬ時鳥

秋風吟

朝霧や荒庭の芙蓉咲んとす  
星月夜西にかゝるは箒星  
廣庭や芭蕉に月の落ちかゝる

紫

川

紫

川

水打てば秋海棠に風起る  
城跡の烟ともならず秋の風  
石原の野菊小さくねじけたり  
秋の川渡れば古き社かな  
紅葺をとらまはしき女哉  
星月夜親兵衛馬を走らす  
八月の比叡風や湖の上  
鞭つて駄馬を走らす野分かな  
下宿屋や障子破れて秋の風  
門に立てば柳が顔に散りがゝる  
名月の池に浮きたり何の魚

批評

第六十六號の和歌を評して、所思を瀝ふ。芝山隱士

和歌は、第六十六號に於る花なりき。俳句、六十號を以て棹尾的運動をなま、跡を雲烟の裡に没してより、一時全く煙滅の境に陥り、和歌獨、其美を肆にせり。往々漢詩の其間に散點せる無きにあらざるも、作者の手腕未だ幼稚にして、想高からず、措字平凡にして詩形をなせるもの罕に、只、粧飾これ事として、乾坤の至理を歌ひしもの有るを見ず。加るに我校逸足之士、多くは和歌に入り、ひたすら和歌

千泣